

読む湘南

～少しだけためになる海の話～

vol.3
2012.2



津波は来る。

という前提から
目を背けないで
ください。
学ぶべきことが
たくさんあります。

東日本大震災では津波によって1万5000人以上の命が一瞬にして失われた。津波から身を守るため、何を心掛け、どう準備し、いかに逃げるのか。湘南海岸の津波対策を考えていきたい。

——湘南ビジョン研究会代表 片山 清宏



私たち「湘南ビジョン研究会」は毎月1回、「湘南の海を考えるミニフォーラム」を開催しています。「読む湘南」ではフォーラムの内容を毎回フォローしていきます。

講師 国土交通省国土技術政策総合研究所
沿岸海洋研究部主任研究官

熊谷兼太郎氏(35)



■過去の津波とその被害

熊谷 こんばんは。名前が長く難しいのですが、国土交通省国土技術政策総合研究所沿岸海洋研究部主任研究官の熊谷と申します。今回は3つのことをお話しさせていただこうと思います。まず1つ目は相模湾に、過去にどのような津波が来ているのかという視点。2つ目にこれまで起こっている地震がどれくらいの頻度で起こっているのか、次にどのような地震が起りうるのかについて。3つ目は津波の避難シミュレーションです。

まず1つ目、相模湾の津波。表を見ると500年間に7回ほど津波を伴う大きな地震が起こっていますね。ということは70年に1度大きな地震が来るのかななど。一番最近は1923年ですから、少しずれがあったとしてもそろそろ来るのかなと、すごく単純には言えると思います。ただしその考え方は間違っているということをここではお話をさせていただきます。

表で同じ色がついているものは同じようなところの海底地盤が動いて発生したものと示しています。ですからこの青い色がついているところ、明応地震と安政東海地震の津波はいずれも伊豆半島沖か半島以西で起きた「東海地震」を発生地として相模湾にやって来たことを示しています。次に黄色のところ、これは相模湾地震と書いてありますが、昔は小田原地震と呼んでいました。今は小田原の人に配慮して西相模地震や相模湾地震と呼んでいます。こうした小田原近辺を震源地（「西相模断層」）とする津波を黄色で示

過去500年に7度来たから70年に1度、というのは間違い

してあります。ピンクのところは「相模トラフ」といって、小田原の沖から房総半島にかけて起こるもので、最後に白いところは津波地震といって、ちょっと津波のメカニズムを知るのが難しい地震なんんですけど、少し沖のエリア、「房総沖」で起こったものと考えられています。以上4タイプの津波があると考えてください。何が言いたいかというと、津波二大地震は70年に1回ではなく、地震が起こる場所が4つに分かれているですから、それぞれの地震が何年ごとに起こっているかを考えないといけない、ということです。

次に津波の第1波到達時間と最大波についてです。

- ◆1703年 元禄地震・震源=相模トラフ(房総半島南端) 江ノ島6分-3.1秒 由比ヶ浜7分-4.6秒 小田原2分-1.8秒 三崎8分-5.9秒 横須賀7分-3.1秒
- ◆1923年 大正関東地震・震源=相模トラフ(相模湾沖北西80キロ) 江ノ島6分-7.1秒 由比ヶ浜7分-9.0秒 小田原1分-0.5秒 三崎7分-6.0秒 横須賀23分-1.5秒

もちろん場所にもありますが、だいたい5~9秒の津波が来たわけです。鵠沼あたりですと海岸から500㍍くらいまで浸水しています。到達時間もおおむね10分以内

過去約500年間の相模湾の津波

発生時期		地震名	規模(M)	主な被害など
西暦	元号			
1	1498	明応7	明応地震	8.2~8.4 大仏殿の堂舎を破壊、溺死200人
2	1605	慶長9	慶長地震	7.9 三崎で津波4~5m、死者153
3	1633	寛永10	相模湾地震	7.0 地震被害大きい、熱海、伊東に津波
4	1703	元禄16	元禄地震	7.9~8.2 錦倉二ノ島居まで津波で死者600、片瀬で家流失、藤沢~平塚で大波上り、船渡止まる、小田原で死230、片浦で家・船流失
5	1782	天明2	相模湾地震	7.0 地震被害大きい、熱海、安房に津波
6	1854	安政1	安政東海地震	8.4 江の島片瀬数波きたる、下田で津波7m、露軍艦ディアナ号が大破・沈没
7	1923	大正12	関東地震	7.9 錦倉で津波20数人死、地震で大仏40cmずれ、茅ヶ崎で住吉の橋根露出

には第1波が来ていることがわかります。

では2つ目の視点、頻度の話に移ります。今回は12月に神奈川県が新しい浸水予測というものを作ったので、それをベースに話をさせていただきます。これが対応しているものは大きく分けて3つのものです。1つは明応型の地震。これは先ほどのカラフルな表を見ていただければわかりますが、1498年の伊豆・下田、東海地震の付近で起こって相模半島にやってくる津波です。慶長型は1605年の正体のわかりにくいものだと申したものです。そして3番目のものが、元禄型の関東地震と国府津松田型の断層の連動地震ということで、少し沖合の相模トラフで起こっているものと陸に比較的近いものが連動した場合のものです。

地震がどういう頻度で起こっているかですが、明応型の地震は東海地震に対応するものですから、中央防災会議の言葉を使いまして「いつ発生してもおかしくない」。非常にせっぱつまっているわけです。次に慶長型。正体をつかむのが難しい地震ですが、過去の似たような事例をつかむことさえできておらず、どのような周期で起こるのか、まだ研究の段階にあるとお考えください。そして元禄の連動型ですが、発生頻度が2300年程度で、直近が約300年前の江戸時代ですから、ここ数十年の間では

第1波は10分以内にやつてくる

ほとんど起ることはないと考えられています。ただし、もう一方のそれと連動すると思われている松田断層のものは、800年から1300年以内に起きていると考えられています。数字にしますと30年以内に16%の確率で起ると言われています。30年以内に16%の確率と言われても理解するのが難しいのですが、仮に30年に50%であれば、60年の間にほぼ起こるということになります。とにかく16%というのは、地震が起こる確率としては、かなり高いものであるとお考えください。

最後の話に移ります。震災の発生を受けて、防災基本計画という災害に対する避難計画が改められ、津波発生時にはおおむね5分程度での避難を目指しましょうということになりました。ただしこれは非常に難しい数字です。あくまで高い目標を掲げているとご理解ください。

モデルケースを示します。ある地区で全く避難指定ビルがない場合、指定避難場所への平均距離が300㍍だったとします。この場合、避難に要する時間は5~6分です。この地区に5つの避難指定ビルを足した場合、避難距離は150㍍ほど減り、時間も2分40秒短縮されます。このことからも分かる通り、避難指定ビルがどれくらいの数を確保できるかは非常に重要です。また身近なところのどこに避難指定ビルがあるかを認識しておく必要もあると思います。

パネルディスカッション

片山 それではパネルディスカッションに移りたいと思います。今の熊谷研究官のお話を踏まえて、実際に我々はどういった対策を取ることができるのかというのを議論していきたいと思います。まずは、藤沢市の災害対策課長の渡邊様に自己紹介いただきたいと思います。

講師 藤沢市
災害対策課長

渡邊 伸二氏(54)



渡邊 藤沢市の災害対策課長をしております渡邊と申します。藤沢の南部地域にお住まいの方は、津波の危険性に対して非常に心配されています。防災行政無線が聞こえないという声が多く聞かれましたので、この3月まで

に防災行政無線を16機増設することにしました。また鶴沼、辻堂、片瀬、村岡、藤沢の各住民の方々に、お住まいの地域が海拔何メートルであるのかを記載してある避難情報マップをお示ししました。なぜこの地域の方々が対象かというと、海岸から藤沢バイパス、国道1号線を越えるまでは平地で、津波がどこまで来るか分からぬからです。

去年の末日の時点で185の建物と避難ビル協定を結ば

せていただきました。これは神奈川県で断トツでトップなわけですが、今後もこれに甘んじることなくさらなる避難ビルの確保をしていきたいと思います。

片山 今日は3つの点を議論したいと思います。1つ目は、藤沢市には年間400万人の海水浴客が訪れます。これは日本一の数字です。夏のピーク時、どう海水浴客を避難させるかという点。2つ目はみなさん1番関心のある、住んでる皆様方、住民の方がどうやって避難するのかという点。そして3点目は事前の対策として地域の自治会、あるいは個人でどんな対策が出来るかという点です。まず1つ目、夏のピーク時どう海水浴客を避難させるかという点について。風間さんはライフセーバーですので自己紹介を含め、まずこの部分を簡単にお話いただければと思います。

講師 西浜サーフライフセービングクラブ
風間 隆宏氏(37)

藤沢市に185の津波避難ビル

風間 ご紹介いただきました西浜サーフライフセービングクラブの風間と申します。ライフセービングって溺れちゃった人を救助するっていうイメージが強いんですけど、ライフセービングの基本的な考えは、いかに救助の場面を作らないか、未然に防ぐかです。津波を防ぐことはできないですか



ども、いかに準備していくかということがライフセービングの非常に大きなテーマなんですね。

藤沢市には3つの海水浴場があります。片瀬西浜海水浴場、ここが一番人が入るんですね。江の島を挟んで反対側が片瀬東浜海水浴場。それから辻堂海水浴場。それぞれの間は遊泳禁止区域になっていますが、実際にはサーファーも数多くいます。釣り人などを含め、夏のピーク時には数万～10万を超える人がこのエリアに集まっているのが現状です。またその多くは地元の人ではなく、土地勘がない人たちです。こういう状態の中で、どうやって津波に対して対策を立てていくかということを皆様で認識していくことが重要です。

■海水浴客の避難——土地勘という壁

渡邊 行政側の避難対策としては134号線から陸側、そこにマンション群が連なっているのですが、3階建て以上のビル、建物のほとんどと避難ビル協定を結ばせていただきました。最悪の場合、そこに逃げていただくことしか今のところ手段はございません。

片山 避難ビルには住民優先というのはあるのですか？海水浴客が押し寄せて、住民の方が上がろうと思ったら、いっぱいだったとか…。そうした場合の住民と海水浴客の区分けというのはあるんでしょうか？

渡邊 基本的には全くありません。いざという時に、あなたは駄目ですよなんていうことは当然できませんし、もう本当にパニック状態になると思います。

片山 実際どうやって避難誘導するのかというのをぜひ風間さんにお聞きしたいんですが。

風間 まずは津波が来るという情報をいかに伝えるか、その方法として防災行政無線というのが1つ大きな手段としてあります。それから片瀬海岸ですか鵠沼海岸などに電光表示板がいくつかあります。あとは声で教える。この3つの手段くらいしかないですね。避難に対して何分使える

か、は非常に重要なファクターです。もし5分という話になると、例えば海水浴場で波が高くて昼から遊泳禁止にしますよという時に、海に入っている人を全員、浜に上げるので精いっぱいです。それは何時から浜に上げますって全部準備をして、ヨードン

ってスタートして5分くらい。それだけでもう津波が来てしまう。上がって下さいと言っている我々も津波に巻き込まれてしまう非常に厳しい現実があるんですよね。

あと周知したあと、どうやって避難誘導させるかという問題もあります。そもそも誰が避難誘導するのかが問題です。ライフセーバーというのは基本的にはボランティアで

あって、消防団でも警察でもない、社会的地位が全くないんです。何かあった時の保障がないので、もしそこで何かに巻き込まれても、極端に言うと美談でしかないんです。そういう社会的地位が明確になっていないライフセーバーが判断するのは非常に厳しい。

あとは避難経路ですね。地元の方は片瀬山の方に行くと高台になっているとわかるのですが、実際には大多数の方が地元外から来てきます。気仙沼あたりだと道路に避難経路とか矢印が書いてあります。そういうのがあるといいですよね。

片山 事前に観光客の方に津波が藤沢であれば10.5m来る可能性がありますよ、と。こういうのはしっかりと伝える必要があると思うんですが、正直に言いすぎると逆に怖くなってしまう海水浴客が減っちゃうじゃないかなと思うんですけども、この防災対策の情報提供と観光客に来てもらうPRのバランスというか、ある意味矛盾している部分は観光という意味ではどういう対策が可能ですか？

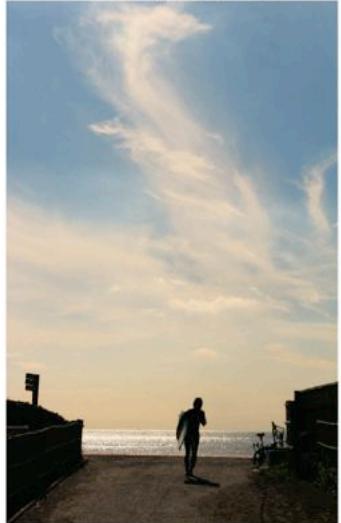
渡邊 非常に難しいですね。行政側で言えば観光収益は税金に当然跳ね返ってくるわけで、藤沢市も観光客誘致には観光課はじめ様々な商店街連合会、商店も含めて取り組んでいます。一方では災害時のことを考えれば、海上に三陸と同じ様なスーパー堤防を作るか、景観を取るか安全を取るかといった議論まであるのが現状です。

■地元住民の避難——理想と現実

片山 続きまして住民側の話に移っていきたいと思います。今日いらしている皆さん1番関心がある、津波があった時どう逃げるのか。そして3つ目の論点もここで一緒に議論したいと思います。どういった事前準備が必要なのか。今回、自治会レベルでどういった対策を考えているのか、鵠沼海岸1丁目の自治会にお話をうかがいました。実は今日、その自治会の自主防災会会长である葉木様にお越しいただいています。自治会としてどういった取り組みをしているのか、簡単にお話しいただければと思います。

葉木 ただいまご紹介に預かりました葉木と申します。鵠沼海岸1丁目というのは小田急線の線路と海の間の狭く細長い平たんな土地で、関東大震災の時にも津波が来た場所です。いかにして安全に逃げるか、先月、避難訓練を行いました。藤沢市が10月に災害ハザードマップを配布したのですが、住民にそれをもとに自分がどこに逃げれば良いのか、自分で判断していただく。自治会の人間

海水浴シーズン、ビーチからの避難誘導は大きな課題だ



片瀬東浜にある津波情報の電光表示板

ってスタートして5分くらい。それだけでもう津波が来てしまう。上がって下さいと言っている我々も津波に巻き込まれてしまう非常に厳しい現実があるんですよね。

あと周知したあと、どうやって避難誘導させるかという問題もあります。そもそも誰が避難誘導するのかが問題です。ライフセーバーというのは基本的にはボランティアで

がここに逃げなさいっていうのではなく、ここに住んでいるからこの避難ビルに行くと自分で判断して、それを申告していただいて、実際当日は自宅からその避難場所まで何分かかるのかと。

国の方では5分以内で避難と言いますが、自分でバーッと判断して準備してどこか目的の避難ビルに行くと、その作業全部で5分ってことはまず不可能です。個人的には30分で目的の所へ行くぐらいの目安、目標にしないと住民の方は諦めてしまいます。それから避難ビルに関しても、行政は協定を結んだところでおしまいなんです。その避難ビルに住む方々はどう受け入れるのか、避難した人々はどこでどうやって時間を過ごすのかとか、そういう細かなことは一切決めていないのが現実です。例えば3.11の時には津波警報が解除されるまで1日掛かったんですよね。丸1日も避難ビルに皆さんおられますか？トイレの問題とかございますよね。本当の時、計算上そうなっても現実には本当に難しいんだよっていうのが私の今の実感です。



片山 避難ビルの多くはマンションですよね？今、マンションってオートロックじゃないですか。いざという時、避難した人はどうやって入ればいいのでしょうか？それともう1つは、例えば寝たきりの方とか足の不自由な方がいらした時に、5分で逃げろと言われてみんな逃げてもその人たちが残ってしまう。この方たちをどう誘導するのか。

渡邊 まず1点目のオートロックについては、部屋の番号を任意で押してその方が解除してくれないと開かないんです。ですが現実問題それが出来ない場合にはガラスを割ってくれ、入口を割ってくれということをお伝えしています。藤沢市の方で落着いた段階で保障させていただくということです。

2点目について、実は災害対策の中で海水浴客対策と要援護者対策というのは非常に重たい課題なんです。行政として、その時、その場面で助けに行くというのは正直できない。そういった中で、釜石の例で言うと釜石の昔からの言い伝え『津波でんでんこ』というのがあります。とにかくもうてんでんバラバラに逃げるしかない。落ち着いた段階でその地域の方々が要援護者をいかに助けることができるか。そして最後に公的機関の援助があるか。その順番なんですね。自助、共助、公助。とはいえ、やはり普段のお付き合いの中から、廢れてきた向こう三軒両隣というのが今後の災害の対策になると思います。

熊谷 避難ビルがどこにあるのかっていうのは避難情報

マップで確認できると思うんですが、そのビルがどういうビルなのかということまでは書かれていませんか？

渡邊 津波避難ビルには目印として、ここに入って下さいというところ、だいたいは正面玄関なんですけども、そこにB4判くらいの夜は銀色に光る夜行塗料の目印と、ここが避難ビルだよというJIS企画のマーク、これは日本共通のマークなんですけども、そのシールを貼っておいて下さいとお願いしております。ただその建物がどういう形をしていて、どこから入れば良いのかというところまでの指示は、防犯上の観点で一部のオーナーさん、管理組合さんから、それだけの情報は流してくれるなどご提案をいただいております。

片山 実際に逃げやすい場所かどうか、そういったことは地域の人しかわからないでしょう。行政が協定という制度をつくるというところまでやって、詳細な部分はそれぞれの地域、個人が責任をもって1つ1つ自分の目で確かめていかなければいけないと感じました。

ここで皆様にご質問をいただきながら、住民側の避難をどうやっていくべきなのかをさらに深めていきたいと思います。

個人でできる対策

参加者 私のところは鵠沼の松が岡で、近くに湘南学園と鵠洋小学校があるんですけども、夜中であれば建物がクローズしていますよね？

渡邊 鵠洋小学校は公立、湘南学園というのは幼稚園から高校まである私立で非常に大きな建物ですね。両校とも藤沢市と避難施設として協定を結んでいます。そして津波の避難ビルも兼ねている。夜間に災害が発生した時、もしかなたが一番最初にそこの施設に行った場合には、どこでもいいですからガラスを割ってください。そして入ってください。中から入口のカギを開けて皆様の避難を手助けしてください。その辺の協定を結ばせていただいております。

参加者 夏のピーク時だと結構車が多い。それでみんな山側や、住宅街の中へと逃げ込むと思うんですね。その時には、車を止めて逃げるという交通規制のようなものがあ

ましたよね？有事にはそのルールがほとんどなくなっちゃうと思うんですが、そういうときの対処というのは、市の方、行政の方ではどうなっているのかなと思います。

渡邊 そういうことは基本的にできないです。海のそばに住む方は今回の震災で危機意識を持っていらっしゃると思います。ですからいざという時、車で逃げた結果、渋滞が起きることの危険性を認識している人も多いでしょう。ですが、



江ノ島大橋(車道)、弁天橋(歩道)の被害状況によっては島民が孤立することも…

藤沢市民が歩いて逃げなさいと言われているのに、観光客の方々がついた渋滞で市民が逃げ場を失ってしまうケースだってあるわけです。鵠沼などは古い街並みが多いのですから、おそらく車が入ったとしてもブロック塀の倒壊だと、道路が隆起してひび割れを起こすなどで、途中で詰まってしまうと思います。だから、皆様は逃げながら、車に乗っている方に車を置いて逃げろと伝えていただきたい。お近くにお住いのおじいちゃんおばあちゃんなど耳が遠い人のために、早く逃げろと避難を促しながら逃げていただければと思います。

参加者 先ほど渡邊さんから、釜石の津波でんでんこの話がありました。今日の話の中で一番欠落しているのが教育のことです。釜石では学校にいた子供たちが全員助かったので釜石の奇跡と呼ばれているんですが、それは全然奇跡じゃなくて、江戸時代から津波によって、家どころか一族そのものが途絶えてしまったことがあったので、地震を感じて津波が来そうであれば、子供であってもおじいさんであっても山にいて町にいても、それぞれで高台に逃げるというのが、でんでんこという教えなんですね。その教えを釜石市は学校教育の中で、小学校から中学校卒業までの9年間教えているんです。それを月に1回行います。この教えが人口4万人の街全体に広がっている。

子供のころから教育を行うことが大切だと思います。子供に教えると子供が親に伝えます。このことをぜひ渡邊さんに、教育委員会の方に、縦割りというものが存在することを存じていますが、防災の第一人者として防災教育をぜひ強化していただきたい。以上です。（会場拍手）

□危機感を風化させないでください。

片山 ありがとうございました。では最後に講師の方々からお一人ずつコメントをいただきたいと思います。

熊谷 こういう場に来てくれない方、関心をなかなか持つて下さらない方をどう巻き込んでいくかということなんですね。少し光明があったのは、人というのはすごく影響されやすいということ。私もそうなんですけど、逃げろと言

って人が走り出すと、不安になってついていってしまうんですね。このような率先者、率先して避難していく人がいることがすごく大切なことだと思います。

風間 今は3.11が起ってすぐなので意識が高いんですけど、これから3年5年20年が過ぎるとみんな忘れていくと思うんですね。忘れないということがまず一つ大切なことだと思います。今、熊谷さんからお話をあったように、突然のことに対応できることが大切です。日本ライフセービング協会でも、ライフセーバーとして津波対策は何ができるかということを考えまいりまして、我々は率先避難者になろうという考え方で進めております。もちろん、それは置いて逃げるとい

フォーラムには過去最多の80人を超える参加者。関心の高さがうかがえる



うことではないので誤解されてしまうんですけど、ここでは観光客の方も多いので、私たちについてきて逃げてもらえたならと思います。

渡邊 大きな地震が起った場合は津波が来るということを想定して行動を起こしてもらいたいと思います。避難して津波が来なければ幸いですよ。普段犬の散歩などで外を回っておられる方々もおいでになると思うのですが、ただ散歩をするだけではなく、有事の際に自分はどこに逃げるのか、あそこに逃げようという風にお考えいただきたいのです。そこにはこれくらいの所要時間で行けると頭で想像するのではなくて、実際にそこを歩いて計ってみてください。それと何本も道があるのであれば、違う道のルートをたどってそこに行ってみてください。その際に違う道を通るのであれば、もしかしたらこのブロック塀が倒れてしまうかもしれない、このお店の看板が落ちてくるかもしれないといった風に、周りをきょろきょろ見渡しながら、自分なりに危険を想定してみてほしいんです。そのなかで、一番安全に逃げられるルートを確保しておいてほしいんです。そして、ここが駄目であればあっちを回るという風に、複数持っていてほしいんです。

それと避難するにあたっては、すぐに逃げ出すための携帯用の非常品を準備をしておいてください。それは食糧よりも水です。家族が多いのであれば、1㍑や2㍑の物を、お父さんやお母さんや子供で分けて持てるようリュックを準備しておいてください。こういった日頃からできることを今のうちからやっていくことが藤沢市の減災につながるのかなという風に思っております。

片山 ありがとうございます。行政の視点、研究者の視点、あるいは地域の視点など、様々な視点から津波対策のことで、充実した議論ができたと思います。我々湘南ビジョン研究会は、「ブルーフラッグ」というビーチに与えられる国際環境基準の、アジア初の認証取得を目指しております。様々な基準があるんですが、その国際基準の中に津波対策というものが入っておりません。我々は日本なりの基準として津波対策を取り入れたいと思っております。観光客もいらっしゃる中、安全なビーチであるということを、その基準を達成することで立証して、安心してきていただけるような海岸づくりをしていきたいなという風に思っております。本日はどうもありがとうございました。

笑ってる場合じゃないぞ



..... < 6 >

私たちが目指す理想のまちづくり

「湘南都市構想2022」とブルーフラッグの取得

「湘南ビジョン研究会」は、10年後の湘南地域のまちづくりビジョン「湘南都市構想2022」の作成と、ビーチの国際環境基準「ブルーフラッグ」の認証取得を目標に掲げ活動しています。現在ブルーフラッグチーム、湘南都市構想チーム、広報戦略チームの3チーム体制で、運営メンバーは13人です。メンバーとしてご協力いただける方がいらっしゃいましたら、ご連絡下さい。

◆湘南都市構想2022

4月キックオフミーティング開催

「湘南ビジョン研究会」では、湘南の特性を最大限に活かした理想のまちづくりを目指し、10年後のまちづくりビジョン「湘南都市構想2022」を1年間かけて作成していきます。2012年4月に「教育・スポーツ」「観光・

湘南都市構想2022体系図(案)



産業」「福祉・医療」「防災・交通」等の分野別分科会をつくり、キックオフミーティングを開催します。湘南地域在住、在勤の方々や有識者らとともに、みんなで自由に話し合いながら進めていきたいと思っています。

参考情報: 参加してみたい!と思う方はぜひご連絡下さい。「湘南都市構想2022」の特長や策定作業の進め方は、次号以降で詳しくお伝えしていきます。

連絡先: shonan_vision@hotmail.co.jp 担当: 片山

◆ブルーフラッグ取得への道

仮申請に向け、各ビーチ調査中

逗子、腰越、片瀬東浜&西浜、サザンビーチの現地調査を行いました。現在はブルーフラッグの審査項目に対し、各ビーチの個別評価中です。同時にブルーフラッグの仮申請に向けて、日本全体のビーチの状況をとりまとめており、今月中(2012年2月)の提出を目標に作業を続けています。

海岸漂着物処理推進法

「美しく豊かな自然を保護するための海岸における良好な環境及び環境の保全に係る海岸漂着物等の処理等の推進に関する法律」…って、名前、長すぎるだろっ!



昨年12月、私たちは「湘南海岸ゴミ問題への挑戦」と題して第2回ミニフォーラムを開きました。海洋ゴミの問題解決のため、ボランティア団体が行政や研究者とともに海のゴミの実態調査や清掃活動に取り組み始め、地方から国へと広がりをみせたことを学びました。

こうした動きを受けて、2009年に海岸漂着物対策の推進を目的として成立したのが「美しく豊かな自然を保護するための海岸における良好な環境及び環境の保全に係る海岸漂着物等の処理等の推進に関する法律(海岸漂着物処理推進法)」です。覚えるには少し長すぎる名称ではあります…。この法律により、今まで不明確だった漂着物処理についての国や地方公共団体の責務、事業者や国民の責務が定められ、関係者相互の連携の必要性が定められたのです。海岸ゴミの回収・処理や発生抑制等の今後の取り組みに期待が持てるようになりました。

しかし一方で、海の底に沈んでいる海底ゴミの法整備はなされていません。行政の責任は不明確であり、海底ゴミの大部分は未回収のまま放置されているのが現状です。海底にはどんなゴミがどれくらい沈んでいるのでしょうか?湘南ビジョン研究会では今後、海底ゴミの現状についても研究していきます。

広告募集

「読む湘南」は皆様のサポートを必要としています。より良いものを創るために、「広告掲載」という形でご支援いただけないでしょうか。全面から1/8サイズまで、用途に応じて変形も掲載可能です。「協賛」として活動をご賛同いただける方

も募集します。

個人、企業は問いません。ロゴ等の使用もOKです。下記アドレスまでメールにてお問い合わせ下さい。よろしくお願いします。また各月のミニフォーラムへの参加申し込みも同アドレスにご連絡下さい。

shonan_vision@hotmail.co.jp 担当: 瀬田

◆ 美味しい湘南

小田原

L'OFFICINA DEL CIBO

チョイスが多いとやっぱり楽しいですよね。
『何食べよう！』って悩むことは
幸せなことだと思うんです

小田原駅から15分ほど歩いた国道1号線沿い。
「L' OFFICINA DEL CIBO（ロフィチーナ・デル・チーボ）」は歴史を感じる洋風の佇まいで、一見何のお店
か分からぬ。それもそのはず、建物

は大正13年築
の看板建築で
元洋品店。オ
ーナーシェフ
の磯野勝幸さ
んが奥様と2
人で切り盛り
しているトラ
ットリアだ。

「銀行の支
店だった時代

もあったみたいですよ。
元々アンティークが好き
で、この物件は散歩して
いて見つけました」

漆喰の壁を黒く塗って
木枠を取り付けた“黒板
風”の店内メニューやカ

ウンターの加工、暖炉に飾られたキャンドルや数々の額
縁のチョイスなど、内装は極力自分たちで作り上げたとい
う。ひときわ目を引くワインのコルクで作られたイタ
リアの地図は奥様作。「ヒマでしょ？」と笑うが、暖か
い雰囲気を出すのに一役買っている。

「オープン前に建物に自分でペンキを塗っているとき
から、ご近所の方に『何ができるの？』と声を掛けて
ただいたりしました」

料理は「シンプルさ」を大切にしている。オリーブオ
イルと塩のみで味付けしたグリルなど、食材の持ち味を
生かした皿も多い。素材を重視しながらあえて食材の産
地をメニューに載せないのは「自分が美味しいと思うも
のを使っているから」。先入観を持ってほしくないとの
思いもある。一方でお客様には「選ぶ楽しみ」を感じて
ほしいという。

「メニューを見たときチョイスが多いとやっぱり楽し
いですよね。『何食べよう！』って悩むことは幸せなこ
とだと思うんです」

その言葉通り、ランチコースのパスタ・リゾットは実
に10種類。メインディッシュとデザートも4種類から選
ぶことができる。また夜はワインを飲みに来るお客様も

多いので、アンテ
ィパストにも力を
入れている。お酒
飲みにはうれしい
心配りだ。

額に入れて飾っ
てあるTシャツに
はイタリア語で
「つべこべ言わず
に黙って食え！」
とロゴを入れる遊
び心。「夫婦2人でやっているので、頑張りすぎないよ
う頑張っています（笑）」。

高い天井の開放感、手作り感覚あふれるアットホーム
な雰囲気。ゆったりした時間を過ごしたいときこそ行
ってほしい。「L' OFFICINA DEL CIBO」はそんなお
店だ。



★ランチメニュー

LUNCH A	本日の前菜、パスタ・リゾット、カ フェ 1800円
LUNCH B	本日の前菜、パスタ・リゾット、メ イン、デザート、カフェ 3000円

営業時間 18:00~22:00
ランチは土日祝のみ営業
→12:00~14:00（予約制）
第3水、木
小田原市南町3-2-53
TEL & FAX 0465-24-3552